

は し が き

資料センタースタッフの諸氏によるそれぞれが担当した研究及び事業の簡潔な概要報告が完成した。それらは大きくは原爆被災に直結する諸問題に取り組んだものと、そのような研究を可能とする基礎的方法の開発に取り組んだものに分けられる。資料センターの本来の使命である原爆被災の学術的資料の収集、整理、保存の推進が順調に進められつつあると共に、それらの資料の科学的分析を行い、原爆被災による人体への影響をさらに解明する研究も次第に芽を出しつつある。チェルノブイリをはじめとする世界の放射線による環境汚染の問題はますます原爆被災の科学的データの重要性を高めつつあり、今後資料センターが担うべき領域が国際的広がりを持つてくることが予測される。

被爆者の健康管理の基盤となる定期検診データの蓄積とその分析が重要なことは言うまでもないが、身体的障害の発見に重点をおいていたこれまでのデータ集積に加えて、被爆者が受けた精神的、心理学的影響に対するデータ不足が近年痛感され始めている。これらの分野でも当資料センターのスタッフが既にいくつかの取り組みを開始していることは特筆に値する。今後の発展に期待すると共に、放射線被爆によって生じる、身体的影響と精神的影響の独特の二面性について本格的に学問的メスを入れる時期にきていることを強調しておきたい。

力を入れている加齢現象の病理学的研究が将来的に臨床的な加齢関連疾患の体系化と結合する可能性にも期待したい。放射線によって生じるとされる加齢促進を臨床的に証明することはかなりの困難を伴うことが予測されるが、高齢化しつつある被爆者における加齢関連の諸問題の研究も推進されねばならない。被爆後50年を迎えるに当たって原爆の人類に与えた影響の全貌を余すところなく記録しつつ、分析するという責務を担ってスタッフ一同で1994年度の仕事に邁進したいと考える。

原爆被災学術資料センター長 朝長 万左男